

困っても困らない



中藺和子

東京工業大学物質理工学院CREST 高田チーム
[226-8503] 横浜市緑区長津田町 4259
特任助教, 博士(工学).
専門は超分子化学, 高分子化学.
nakazono.k.aa@m.titech.ac.jp
www.op.titech.ac.jp/polymer/lab/takata/

japanese/index-j.html

昨年度より高分子学会の男女共同参画委員に加えていただきました。出産以降、ずっと支援を受ける側であったのですが、今度は支援を考える側として恩返しする機会をいただいたと思っております。支援の輪を広めるためにも私の子育て支援フル活用について書いてみることにします。

子育て支援のフル活用

博士の学位を取得後、複数のプロジェクトの特任助教や研究員と立場の変遷を経ながらも、大学での研究生活も11年目を迎えました。途中、東京工業大学の男女共同参画推進センター(現男女共同参画部門)付きの助教職として採用していただき、その任期の間に出産を経験しています。当時、すでに学内には育児・介護中教員・研究員向けの教育・研究・事務アシスタントプログラムが整備されており、比較的フレキシブルに必要な補助を申請できる状況でした。初めのうちは補助者に何を頼めば効率良く進むのか、という試行錯誤がありましたが、やがて急病により子供を保育園まで迎えに行かねばならないといった、突発的に仕事が立ち行かなくなる状況が増えるにつれ、遠慮せずに頼める人がいるというのは大変心強いもので、やらねばならないことが不在の間にも進むことがとてもありがたいと思いました。

ちょうど全国的に大学の男女共同参画のインフラ整備が進んでいたころでしたので、出産の数年後には東工大にも学内保育園が設置されました。早生まれのため、ただでさえ枠の少ない保育園探しに苦労した経験から、これはこれから出産する人には心強いだろうなと思いました。このように、インフラ整備は着々と進んでいたときでしたので、研究できないなどと言っている場合ではなく、あらゆる支援を使って知恵を絞れば何とかかなるかもしれないと前向きに考えていました。ただ一つだけ諦めたのは学会参加です。自分のモチベーションを高める意味でも都内近郊の関連学会には参加したいと思っておりましたが、学会参加時に限って保育園から急病だという電話がかかってくるのです。そんなことが3、4回続いたところで、学会参加は先の楽しみにとっておいて、今は論文執筆に注力しようと気持ちを

切り替えました。研究者は論文を通じて世界の研究者とコミュニケーションすることが可能なところは素晴らしいですね。学会に参加できなくとも論文を書けばちゃんとレスポンスが返ってくるのです。当時は男女共同参画推進センター助教の任期の終わりも近く、ポジション探しもしましたが、次をつかむことができずにおりました。しかし幸いなことに、恩師にJSTの研究プロジェクトの特任助教として拾っていただけることになり、さらに思わぬ恩恵を受けることとなりました。JSTにも出産・子育て等支援制度があり、私のような研究プロジェクトで雇用されている場合でも利用できる制度があるというのです。この制度にも3年間ご支援いただき、プロの研究員を雇用することができたことにより、新しいことにも挑戦できるようになって研究の幅も広がりました。子供の小学校入学と同時に支援制度からも卒業し、現在は自分の手を動かして研究を進められることを楽しみながら新しい研究の芽を育てたいと取り組んでいます。

ピンチはチャンス

諸先輩方の努力によって作られた諸制度をフル活用させていただいて今日に至りますが、恩師には「制度を作るのはとても大変なのに、使ってくれる人がいないとすぐに縮小されてしまうので遠慮なく利用しなさい」といつもアドバイスしていただきました。確かにアカデミアは競争社会であり、研究や教育にしっかりコミットできないのであれば後進にポジションを明けわたすべきか、という迷いもありました。しかし恩師に遠慮すると言われて考え直してみれば、子育てに限らず家族の介護や自身の病を抱えながら仕事をする状況は誰にでも訪れ得ることですし、そういったことがなくともずっと同じペースで成果を出し続けることは誰にとっても難しいことです。「今はピンチなとき」と思って遠慮せずに支援をフル活用してきたおかげでピンチから脱出しつつあると思います。子育てを通じて人間も鍛えられました。これからもどこかに挽回のチャンスがあるはず、と柔軟なマインドで自身も進みながら、後進のためにより良い支援のあり方について高分子学会での活動を通じて考えていきたいと思っています。